

時代小説傑作選

文芸家
協会
編
日本

江戸風鈴
恋物語



え どふうりん こいものがたり じ だいしやうせつつけさくせん
江戸風鈴恋物語 時代小説傑作選

につばんぶんげい か きやうかい へん
日本文芸家協会 編

© Nippon Bungeika Kyokai 1996



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1996年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

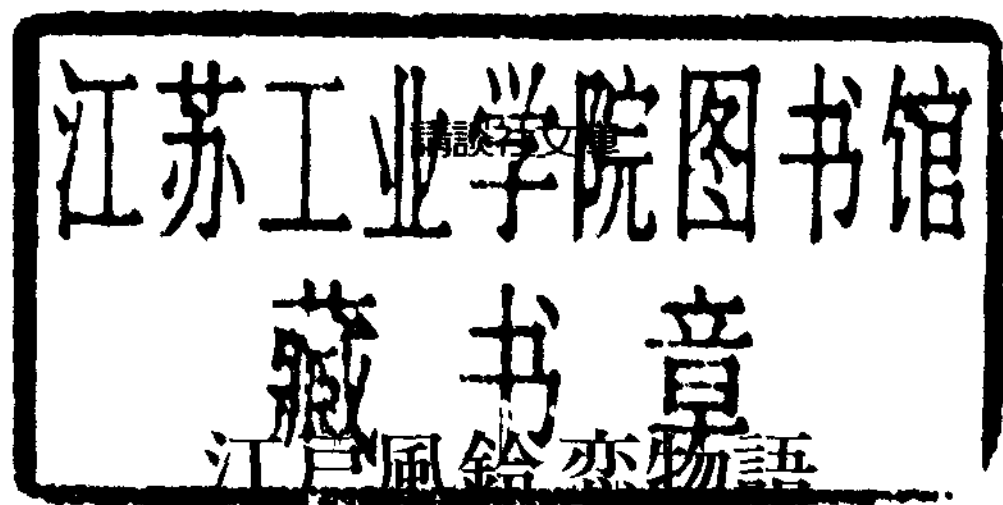
印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-263387-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



時代小説傑作選

日本文芸家協会 編

講談社

〈編集委員〉

伊藤桂一

尾崎秀樹

武蔵野次郎

目次

雪の峠

古川 薫 七

闇討ち

藤沢周平 二六

死出の雪

隆慶一郎 六六

刃傷

津本 陽 六六

島 火 事

白石一郎 二〇

狸の心中——はやぶさ新八御用帳

平岩弓枝 二三

髭

井口朝生 一五

再び消えた一刀斎

南條範夫 一九六

江戸のうわなり打ち

村上元三 三三二

瓜長者の野望——大江戸ゴミ戦争

杉本苑子 二四三

仇(きゆう)

綱淵謙錠 二七九

放し討ち柳の辻

滝口康彦 三〇七

雨 夜 叉

皆川博子 三四三

女敵討の秘剣

伊藤桂一 三五九

解説

尾崎秀樹 三八五

江戸風鈴恋物語

時代小説傑作選

雪の峠

古川 薫

国境の峠にさしかかったころ、雪は降りやんでいた。頭上から日が射しはじめ、三寸ばかりも積もった雪の照り返しで、寝不足の目が痛いくらいだった。

時任市之丞は峠の頂上まで登りつめると、道端の切株に盛りあがっている雪を払って腰をおろした。眼下の町並みが、箱庭のようにちんまりと美しく見える。

——あのどこかに美代と源次郎がいる。

と、心のなかでつぶやいたが、いや源次郎はもう家を出たところであろうと思いなおした。市之丞が非番のこの日、指定した四つ刻（午前十一時）、ここへやってくるという彼らの返事が届いたのは、前々日のことである。

剣をぬけば、とても適う相手ではない兄だと源次郎にはわかっている。警戒してあらわれ

ないこともあり得るが、別に果たし合いをしようというのではないと断っているのだから、よもや約束を違えることはあるまい。

温情に感謝する、これ以上頼めた義理ではないが、借財で身動きできない状態ゆえ、できれば百両ばかり都合してもらえるとありがたい、恩は生涯忘れぬといったことが彼からの返事にはしたためてあった。

相変わずぬけぬけとムシのよいことをいう弟だが、市之丞は黙って渡すつもりである。その金を持って、二人がどこか遠いところに消えてくれればよいとも思っている。

早朝、屋敷を出発したので空腹を覚え、市之丞は用意してきた弁当の包みをひらいた。自分でつくったにぎり飯である。二年前、妻の美代が源次郎と家を出たあと、女中にも暇をやつて、まったく女気のない生活をしているので、そんな所帯じみたことにも馴れてしまっている。冷えきつた飯のかたまりを頬ばりながら、市之丞はふと寂しげな笑みをうかべた。

美代が嫁してきて間もなく、弟の源次郎と川釣りに出かけたことがあった。美代がつくつてくれた弁当を、二人で食べているとき、

「姉上のにぎり飯は白粉おしろいのにおいがする」

と、源次郎がつぶやくようにいつて笑った。

市之丞もそれに気づいていたのだ。ほのかに脂粉の香が移った飯に新妻の肌のおいを感じている自分を悟られまいとするかのように、

「手をよく洗わなかったとみえる。帰ったらきつく叱っておかなければならんな」

そんな心にもないことをいつたのが記憶にのこっている。

——あの折の弟の気持はどうだったのだろう。

と、考えてみた。兄のところへ来た美貌の嫁を見る彼のまぶしげな視線に、まったく無頓着だったわけではない。しかし源次郎は血をわけた弟だ。一年ばかり一緒に暮らし、参勤交替の藩主に従って江戸へ行くときも、嫉妬したり警戒することこそ恥ずべき行為ではないかと自分にいいきかせながら、市之丞は二人を残して国許を出発した。その留守中の出来事である。肉親への信頼を裏切った源次郎が恨めしかった。

——何ということをしてくれたのだ。

顔をあわせたら、そうもいつてやりたい。

妻に対しては愛しさと激しい嫉妬が入り混じる複雑な気持が胸に渦巻く反面、可哀そうだという思いもないではない。柔順な美代は、弟の世話をよろしく頼むという市之丞のいつけ通り、親切に気を配ってやっているうちに、魔がさしたということなのだろう。同い年の美代と源次郎は、幼馴染みである。あるいは前々から互いにひそかな思いを交わしていたかもしれない。その女が兄嫁となって家に入ってきたときの源次郎の気持も察しておくべきだった。

「お人好しもいい加減にしろ」

叔父の木村甚兵衛は青筋を立てて怒鳴りつけた。はたの者の目に、市之丞はよほど間抜け面に見えるのだろう。それでなくとも彼は小太りして鈍重な感じの体つきであり、さがり気

味の濃い眉の下に細い目が吊り上がっている。知らない人には、これが北辰一刀流の免許皆伝を受けた侍とは信じられなかった。

弟の源次郎は母親の血をひいたらしく、兄とは種違いではないかと陰で噂されるくらいに面長の鼻梁の高い整った顔をしている。体格も筋肉質のすらりとした長身である。子供のころ木登りから落ちて骨折し、左腕が不自由だが、普通にしていればわからない。

市之丞は三つ年下のこの弟が自慢だった。城下を二人並んで歩いているとき、娘たちが憧れるような目つきで源次郎を見ると、まるで父親のように誇らしい気がしたものだ。二人の兄弟をのこして両親がはやく死んでからは、事実、市之丞は父親代わりに弟の面倒をみてきたのである。

源次郎がわがままに育ったのは、たった一人の弟を甘やかした市之丞に責任があるともいえる。兄のものは何でも欲しがった。祖父から伝えられた備前長船の銘刀も弟が望むままに渡したが、それを他人に見せびらかす割には剣術に身を入れようとしないうえに。

右腕は十分使えるのだから、小太刀をならったらい、稽古しだいでは人におくれをとることはないと励ますのだが、従おうとはしなかった。では学問で身を立てたらと勧めても耳をかさず、毎日ぶらぶら遊んでばかりいて、親ならぬ兄の脛をかじって暮らしている陰気な若者だから、養子の話もいっこうに持ち上がらない。本人はそれを自分の体の障害のせいだと思いいこんでいるようだった。

「私はどうせ部屋住みで終わる身だ」

そんなことをいつていた源次郎が、いつごろからか長男の市之丞が当然受け継いだ百石の家禄さえ欲しげな態度を示しはじめた。そこで市之丞は隠居を決心したこともある。まだ三十歳にも達しない身で隠居とはなにごとだと、親族の猛反対でこれは実現しなかった。

美代と源次郎が駆け落ちしたことを知らされたのは、市之丞が江戸の勤めを終えて帰国した十月のことである。二人が出て行ったのはその直前で、早朝、旅支度した彼らが峠を越えているのを目撃した者もあり、すでに噂がひろがっていた。

市之丞の帰国が間近にせまり、思いあまって出奔したものにちがいない。四万石の小さな城下町だから、そんな話が行きわたるのも早く、だれひとり知らぬ者はいないというところに市之丞は帰ってきたのだ。

「わたしとしたことが、まるで気づかずにおりました。まことに申しわけございません」などと女中がとぼけたように平謝りするものも不愉快で、すぐに暇を出し広い屋敷にぼつんと一人座っていると、わびしさに襲われて男泣きするほどだった。

夫が江戸詰めにあいだに、妻が不貞をはたらくというのは、必ずしもめずらしいことではないが、まだ新婚という家の事件としては藩内でも前例がないだけに、あきれた顔をする者も多かった。薄情な他人の好奇的な視線にさらされるのは、妻を寝取られた本人ばかりでなく、双方の親族一同身のおきどころもない恥辱を浴びることになる。問題はこの姦夫姦婦をどう処理するかであり、人々の関心もそれにむけられている。

「そなたの不徳のいたすところだ」

叔父が腹立たしげにいうのは、日ごろからの弟に対する市之丞の態度を責めているのだ。「二年ものあいだ若い男と女を一つ家に住まわせたのが間違いである。別居できぬなら、それだけの配慮があつてしかるべきだった」ともいった。

市之丞としては、女が独り暮らしするより、男手のひとつもあるほうがむしろ安心だし、しつかりした住み込みの女中を雇っているのだから、他人から後ろ指をさされることはあるまいと思つていた。

「人目をぬすんでのいまわしき所業、いずれにしろ男も女も同罪である。斬り捨てるほかはあるまい。兩人を探してすぐ旅に出るがよい」

親族代表としてやってきた叔父の甚兵衛は、剛直な性格を剥き出しにして、たとい弟であろうと討ちとつてしまえと詰め寄るのだが、

「妻敵めがたきう討ちなどはいたしません」

と、市之丞は静かに首を横にふるばかりだった。

「それでは世間から笑われるぞよ」

「妻敵討ちしても同様でしょう」

「同じ笑われるのなら、武士の一分を立てよ。家禄を失うのが惜しいなら、養子を迎え、今こそ隠居して仇討ちに出て行くという手もある」

「これは私自身のことですから、どうぞお任せを」

「不甲斐ないやつ。勝手にしろ」

甚兵衛はそれきり口を出さなくなった。

たしかに妻敵討ちは厄介である。妻が殺され、その加害者を討つばあい、これは立派な敵討ちだが、妻敵討ちというのは不貞を犯した二人を私的に成敗することを指し、敵討ちの概念にふくめない。

宝永六年に出た浮世草子『本朝諸士百家記』（十巻）は、武道に関する奇談集で、市之丞も以前江戸でこれを読んでいる。その中に妻敵討ちのことが載っているのだが、まさか自分の問題として降りかかって来ようとは思わなかった。その本には妻敵討ちをしなかった人を評価する話に付けて、こういうことが書いてある。

ある武士が自分の子を客に紹介した。人品骨柄といい立居振舞といい、申しぶんのない息子さんと客が褒めると、父親がこういった。

「わがまま者ではありませんが、ゆくゆく妻敵を討つほどのたわけ者には育てなかったつもりです」

妻敵討ちなど武士のなすべきことではないという考え方を示しているのだ。それが武家社会の通念としてあるのだが、やはり嫉妬にかられて、それを敢行する者がいないわけではない。

親の仇を討つというのなら、ほとんど例外なく藩の許可が出る。妻敵討ちとなると、事情

によつては許されるが、正式には受け付けない。だから「願ひ捨て」にして出奔することになる。つまりは脱藩である。

たいていは藩外に逃亡している相手をみつけ、返り討ちにならないかぎり、まず男を討ち取り、つづいて女を殺す。妻敵討ちもその旨を土地の奉行所に届け出るので法的にとがめられることはないが、本懐をとげたとしても、この種の脱藩者の帰参はかなわないというのが普通だった。

妻敵討ちは、男の意地を通すという激情にかられた行為だが、妻を寝取られた上に、士籍を失う。それが人ふたりの命を奪った代償として支払うべき結末である。ばからしいから無念を噛みこらしていれば、周囲からのあざけりを買うことになる。とにかく割にあわない話だ。

そのまま月日が過ぎ、二年後の十二月に入ってから、美代と源次郎の動静が伝わってきた。二人は隣藩ににいるという。それも国境の峠をひとつ越えたところにある織物の町に隠れているとは、思いもよらないことだった。もつと遠くに行くつもりでいたのだらうが、源次郎が病気になって立往生し、そのままずると腰を据えてしまったらしい。他藩にいる者をむやみに襲うことはできないから、半日ばかりしかかからない近くであつても、一応は安全な場所にちがいがなかった。

話題の男女が隣藩の町に隠れ住んでいるという風聞は、たちまちひろがつて市之丞の耳に

も当然入ってきた。人々にとってはもう忘れかけていたことだが、こうなると噂を蒸し返して、さあ市之丞がどうするかと一斉に注目してくるのも、非情で物見高い世間の常というものであった。しかし市之丞がまったく動こうとしないので、一体どうする気でいるのだろうか。周辺の者は妙にいらいらしながら、成り行きを見守っている。またもや叔父の甚兵衛が血相を変えてやってきたのはそのころである。

「美代の父親は、娘を呼び戻して身共の手で成敗いたすというておる。お前の心が煮えきらぬからじゃ。女がそれで始末されるとすれば、なおさら源次郎をこのままにしておくことはできません」

「心は決まっております。妻敵は討たぬというこの志を通させていただきたいと、先方にお伝えください。それに私には弟の源次郎を殺すことがどうしてもできないのだから仕方がないでしょう。あれは美代と一緒に生かしてやりたい。他人がいかに見ようと知ったことではありません」

毅然とした市之丞の態度はそれなりに立派であり、周りからかれこれ言い立てたところでどうなるものでもなかった。あきらめた甚兵衛は世間にむかって、

「市之丞は、武士として妻敵討ちのようなたわけたことはせぬと申しておる。これも剛毅な男の覚悟というものかもしれん。わが身内ながら見上げた心がけだ」

と、言いふらしはじめた。責めるような他人の視線を払いのけるためのことではあったが、ひとまずは肯かせもした。結局、波風たたずに事はおさまるか、失望した者も少なく